



SINCE 1901 感謝と希望を
日本女子大学・創立100周年

図書館だより

目次

本と人と出会う	西村 圭子	1
「今、学生にすすめる本」特集		
石井 光恵	江澤 郁子	2
源 五郎	小塩 和人	
森田 安一	鷲見 成正	3
榎澤 雅子	金子 堯子	
つかってみようインターネット(続)	鈴木 学	4
宗教の時代から啓蒙の時代へ	森田 伸子	6
『トレヴー・フランス語大辞典』1771年版によせて		
本に学んだ4年間	小野 越子	7
図書館を利用するにあたって	神谷 直子	
私の好きなイス	汐見 陽子	
図書館(目白)からのお知らせ		8
図書館(西生田)からのお知らせ		



本と人と出会う

西村 圭子

アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトは、その著「菊と刀」(1946年)で、日本人の民族意識と行動には矛盾する性格を共有すると述べ、天皇と武士に象徴させタイトルとしている。日本人は伝統的に刀に対する憧れはあるが、銃や砲とは無縁であった。しかし幕末の欧米列強の開国要求に、否応なく砲に対する認識を迫られたのである。

佐賀藩主鍋島直正は、弘化4(1847)年、長崎海防の充実に幕府に進言し、藩士杉谷雍介を江戸に派遣して文献を収集させた。杉谷は、蘭書「ゲシキュット ギーテレイ」(Het Gietwezen ins Rijks Ijzer-Geschutgieterij te Luik, ロイク国立鉄製大砲鑄造所における鑄造法)ヒュグューニン所長の著書を手入して帰藩した。

本書は、高炉・反射炉の構造、操作方法等を示す基本書であり、杉谷は三名の藩士と共に苦心して翻訳し、嘉永3(1850)年に上梓して「煩鉄全書」と称した。同年直正は、鑄鉄砲生産のために反射炉の建設を決断し、「七賢人」と呼ばれる専門家グループに命じた。ただ一冊の「蘭書」をもとに、彼らは翻訳、構想、設計、検証の試行を繰り返して反射炉を完成させた。鑄造実験は16次に及び、14次からようやく実用可能な鑄鉄砲を得ている。七賢のひとり本島藤太夫は晩年、「松乃落葉」にその間の経緯を克明に綴っている。

また、鹿児島藩主島津斉彬も、佐賀藩からこの「蘭書」を譲り受け、安政4(1857)年5年遅れて反射炉建設を完成させ、ここに近代産業システムを作り上げている。江川坦庵も、ペリー来航を契機に葦山に反射炉を建設、佐賀藩に助力を求め、杉谷は経験のある職人を伴って援助した。江川・鍋島は表裏一体の協力関係にあった。水戸藩の徳川斉昭も那珂湊に反射炉を設置した。南部藩医師大島高任は、長崎遊学中にこの「蘭書」を読み、工学への道を志し、指導者としてこれに携わった。安政6(1859)年、斉昭の塾居によって反射炉は稼働を中断する。他方、大島は南部藩釜石において鉱石・銑鉄の一貫処理を行う画期的な高炉を開発した。これが近年まで稼働した新日本製鐵釜石製鐵所である。

一冊の本との出会いが、人と人との限りない知識の源となり、ひいては時代を動かす力ともなることを示している。

(図書館長・史学科教授)

「今、学生にすすめる本」特集

石井光恵（児童学科助手）

藤本由香里著『私の居場所はどこにあるの？ 少女マンガが映す心のかたち』学陽書房 1998：
「コミック、とくに少女マンガの変化を追っていけば時代の価値観の変遷が浮かびあがってくるのではないか」というコンセプトで、徹底的に少女マンガを追って、＜恋愛＞＜性＞＜仕事＞...などについて考える書。「少女マンガの社会学」とでもいえるだろうか。著者は、少女マンガは常に「私の居場所はどこにあるの？」という一つの問いの周りを回っているという。切ない問いではあるが、女性なら誰もが一度は直面する問いかも知れない。 トリイ・ヘイデン著 入江真佐子訳『よその子見放された子どもたちの物語』早川書房 1997：学習障害児たちとその教師が「私の居場所」を求めて繰り返す、心の交流の物語。ノンフィクション。苛酷な運命を背負った子どもたちが、熱血教師トリイと心の絆を結びながら、ひとつの家族のように自分の居場所を確認していくさまは感動的。

江澤郁子（食物学科教授）

『鳥のように風のように - 詩集 - 』長谷川幸夫著 ダイアモンド社 1996年

本書は、8歳にして発病し、筋ジストロフィーと戦いながら、33才で大空に旅立った長谷川氏の詩集です。読んでみると不思議な力が与えられ、生きていることの素晴らしさ、自然を愛する心、心の豊かさを教えられます。

目次をみても、「命、夢、道、風、空、心、愛」と、日頃、私たちが忘れがちな、見失いがちな大切なものを題材としています。

いつ呼吸が止まってもおかしくない状態で、ベットでくぎづけの中で書き続けた著者、「人間一人一人想いは違うけれど、現実を自分で納得いくまで考え、見つめることが大切だ」と他界する数日前に語ったという著者、詩に接して、改めて生きている今が、どんなに大切かを感じさせられます。

源五郎（日本文学教授）

青春時代は、人生は割り切れないものという思いが強まる時期だが、そうした人には、まず第一に『徒然草』を挙げたい。教室を離れてじっくりと向き合ってみてはどうか。同様に、ツヴァイクの『ジョゼフ・フーシェ』やハイゼンベルグの自伝『部分と全体』を薦める。前者はフランス革命の恐怖の肅正を生き延びた男であり、後者はユダヤ系の出自ながら理論物理学の先駆者としてナチ支配下のドイツに残った人物である。二人とも紛れも無い“風見鶏”である。しかし、単純な正義や悪は、実は人生の豊かさの何物かを喪失している。

理論的シエマの美しさに引かれるのも青春の特質だが、その向きには、アリストテレスの『詩学』、マルク・ブロックの『比較史の方法』、ヴェルフリンの『ルネサンスとバロック』、エリオットの「伝統と個人の才能」などの分析の鮮やかさを薦めたい。

小塩和人（英文学教授）

アルド・レオポルド（新島義昭訳）『野生のうたが聞こえる』講談社学術文庫 1997年

環境問題と聞けば、ダイオキシンや環境ホルモンを想起しがちだが、四半世紀前には公害という名称で論じられていた。物質文明の行き過ぎによる弊害例として語られる環境問題には、もう一つ、自然保護や動物愛護など野生の事物を対象とした側面もある。このような環境保護運動では先輩格のアメリカ、つまり環境破壊が早くから進んでいた国のジレンマを書いた本を紹介したい。原書は1949年に出版されている。一言でまとめると、土地が一つの共同体であるという生態学の基本概念と、土地が愛され尊敬されるべきだという倫理的発想と両方に目配せをした書物である。「経済的に好都合かという観点ばかりから見ず...生物共同体の全体性、安定性、美観を保つものであれば妥当だ」(349頁)という一節に、ともすれば土地を見る目が経済的価値に限られがちな現代人は、ハッとす。当たり前だと考えてしまう近代化の趨勢に待ったをかける一冊である。

森 田 安 一 (史学科教授)

「歴史学は現在と過去との対話である」というE・H・カーの有名な言葉があるが、近藤和彦『文明の表象英国』(山川出版社, 1998)はその対話を実現している快著である。「文明, 英国, 近代をめぐる表象が日本人にいかなる影をおとしてきたか」を克明に問いかけている。第1章「一日も早く文明開化の門に入らしめん」では、この福沢諭吉の言葉に示されるように、近代日本人の西洋(イギリス)認識の歴史の変遷が述べられている。とくに戦中・戦後の日本の代表的知識人たちが近代をどう捉え、葛藤したかがよくわかる。イギリスとヨーロッパ, 文明と近代に興味をもつ人に勧めたい。中世イギリスの民衆生活, 都市の誕生, 支配者の権力闘争などに興味ある人はケン・フォレット『大聖堂』(上・中・下巻, 新潮文庫, 1989)を読めばよい。これは小説ではあるが、わかりやすい歴史物語を楽しみ、その後に厳密な歴史学の研究に没入していくこともできるであろう。

鷲 見 成 正 (心理学科教授)

「カニツアの図」

1979年イタリアの心理学者カニツア(Kanizsa G.)は、その著書(Organization in Vision: Praeger, 野口薫訳『視覚の文法』サイエンス社 1985)の中で図1を発表した。何も境目の無いところに明瞭な三角が現れるのを見て、世の視覚研究者たちは大きな衝撃を受けた。このような効果は“existence of parts that require completion that will transform them into more stable, regular, and simple figures.”に由来するとカニツアは説く。先に1906年、岡倉天心は名著The Book of Tea(茶の本)の中で“True beauty could be discovered only by one who mentally completed the incomplete.”と述べている。まさしく「西洋の知」と「東洋の美」を結び付ける役割りをはたしているともいえるこのカニツアの図に、ぜひ関心の目を向けていただきたい。

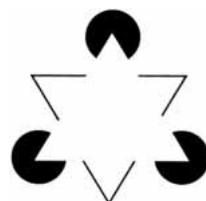


図1

榎 澤 雅 子 (文化学科教授)

今福龍太の本

人類学者今福龍太の名は、W杯フランス大会に向けてひしめきあう種々雑多なサッカー情報のなかから、ある日忽然と私の前に現われた。最終予選のジョホールバル。決勝ゴールとなる球が蹴り込まれる直前、手負いのイランGKと20歳のMFのあいだに生まれた一瞬の「死闘」の意味を、この競技の遊戯性と美学の本質に重ね合わせて魅力的に語っていたのだ。アメリカ大陸を中心に、壮大な視野から今福が繰り広げる移住者集団(ディアスポラ)の文化的問題は刺戟に満ちているが、たとえば『移り住む魂たち』(中央公論社, 1993)や『移動溶液』(新書館, 1998)で、文体そのものが思想であるような著述を模索する著者の姿勢に私は惹かれる。時に詩的であり過ぎる言説を生むことはあるが、言葉と思考が縫り合わせられてゆく過程に立ち会う経験は捨てがたい。多木浩二との対話集『知のケーススタディ』(新書館, 1996)は、今福の方法の魅惑的な解題でもある。

金 子 堯 子 (物質生物科学科教授)

吉村昭『白き航跡』は、明治時代に海軍での脚気患者を根絶させた海軍軍医高木兼寛の伝記小説である。当時、脚気は今のエイズのような病気に位置していて、その原因は細菌といわれていた。高木は海軍病院に脚気患者が極めて多いことに気付き研究を始めた。軍艦の行動とそれに伴う脚気の発病状況に焦点を据え資料を調査した結果に基づき、海軍兵食制度を洋食に替える提案を行い、明治17年に、軍艦「筑波」の乗組員による遠洋航海中の50日にわたる脚気予防試験において成功をおさめた。しかし、当時の脚気研究の主流はドイツ医学の学理主義であって、高木の臨床体験のみに頼っての何の原理も持ちあわせぬ脚気予防策は、否定され続けた。作者の定評ある綿密な資料調査が見事である。高木に対立した陸軍軍医部長が森鷗外であったことも、興味深い。なお、作者の他の医科学の先人達の作品、『ふぉん・しいほととの娘』、『冬の鷹』などの作品も紹介しておく。

つかってみようインターネット（続）

外へ出よう

前回は、図書館で提供している「ホームページ」を例にして話をしました。今回の話では、図書館のホームページのメニューから、「学外サーバ」のページを中心に話を進めていきます。

前回図で示したメニューの中の四つの項目（利用案内、開館日程、資料検索、Online Journal）は、「日本女子大学図書館ホームページ」という家の中の部屋それぞれの扉、と例えることができます。そしてあとの二つの項目は、家の外へ出られる扉と例えることができますでしょう。では実際に「学外サーバ」の扉を開いてみましょう。

このページでは、図書館に関連するホームページが紹介されています。つまり図書館に関係のあるホームページへの「リンク」が集められています（こ

のようなリンクを集めたページは「リンク集」と呼ばれています）。これらのリンクをたどることにより、「図書館の外へ出る」ことになるのです。そしてもう一つの「日本女子大学」の扉からは、直接日本女子大学のホームページを開くことができます。

「学外サーバ」は、外へ出るためのガイドブック、「日本女子大学」は隣の家、と思って頂ければよいでしょう。常識では、隣の家のドアをいきなり開けることは失礼極まりないことですが、インターネットの世界では大丈夫。実際にリンクをクリックすると、よそのホームページが開かれます。

導かれるままに - ガイドブックを片手に～気がつけば... -

「リンク集」は先に説明した通り案内をしてくれます。例に挙げてきた日本女子大学図書館のホームページに限らず、リンクをたどればホームページからホームページへと次々移って行くことができます。一般的にどのホームページでも、リンクされているのはそのホームページに関連している分野であることがほとんどです。ですので、リンクをたどった先にあるリンク集から、別のホームページへ移り...ということを繰り返していると、その分野のホームページを一通り見渡すことができるかもしれません（実際には、リンク集に掲載されていないホームページもあり、辿っていけないのも限界がありますが）。図書館では分類番号（請求記号の数字の部分）が同じ所には同じような内容の図書が集まっていますが、リンク集でも同じようなことが言えるでしょう。そのようにして関連する情報を見ていくことができるのです。

さて、ガイドブックを手にしたのはよいけれど、実際にリンクを辿ることを繰り返していくと、どのようなホームページを渡り歩いてきたのかわからなくなることがあり、自分の居場所を見失ってしまうことがあります。そのようなときは、ブラウザには必ずある「ホーム」というボタンを押せば、最初の出発地点に戻ることができます。例に挙げている日本女子大学図書館のホームページから「学外サーバ」というリンク集をたどり、またそこからリンクをたどり、結局迷ってしまっても「ホーム」というボタンを押せば、日本女子大学図書館のホームページへ戻ることができるのです。



図：日本女子大学図書館ホームページメニュー部分

リンク集の上手な使い方 - ガイドブックはどこまで信用できるか ... -

リンク集には、上でも繰り返してきたように同じような分野のホームページが集まっています。ただ、リンク集に収録されているものにはそのホームページの作者の意向が含まれていることがあります。紹介文も主観的な表現がされていたりもします。書評にも優れたものもあれば駄文もあるのと一緒です。また、リンク集に登録しようとしても、拒否されてしまうこともあるのです。ですので、把握できないインターネットの世界という量的な側面とは別に、リンク集をいくらたどってもその分野のホームページを網羅することはないとも言えます。

そのような背景を考えても、リンク集のようなホームページへの案内は、インターネットの世界から情報を得ようとする者には非常にありがたいものです。少なくとも一つ一つ自分の手で探していく手間は不要なものですから。なので、リンク集を利用する人は、リンク集に頼り切ることなくかつリンク集の中から自分に必要な情報を収めているホームページを探し出していくように心がけましょう。

リンク集には様々なものがあります。例に挙げてきた日本女子大学図書館のホームページにあるリンク集は、図書館に関係するホームページのリンク集です。他にもさまざまな学問分野を内容としているホームページがあれば、その数だけリンク集があると思っていて良いでしょう。というのも、ホームページの構成の基本的な要素の一つがリンク集でもあるからです。

今回は、例として特定のホームページ(日本女子大学図書館のもの)を取り上げましたが、本来の流れではリンク集に行き着く前に、そのリンク集を収録しているであろうホームページがあることが前提です。ですから、自分が見たいホームページを見つけることから始まります。次回は、その辺りを話題にしていきます。

クリック：前回説明した「ページをめくる」動作。具体的にはホームページ上で、カーソルが[矢印]から[指を指す形]に変化する場所でパソコンに付属のマウスのボタンを押す動作をさします。インターネットでは中心的な動作です。

 **学外の図書館関係WWWサーバ**

<図書館関係>

- [学術情報センター\(Japanese/English\)](#)
文部省学術情報センターの総合目録データベースWWW検索サービス。
本学の所蔵についてはOPACを使ってください。
- [日本の図書館と目録サービス\(Japanese/English\)](#)
農林水産研究情報センターで作成したリスト。OPACとホームページにアクセスできます。
- [大学図書館関係WWWサーバ\(Japanese/English\)](#)
東工大で作成したリスト。日本の大学図書館のホームページにアクセスできます。
- [図書館リンク集\(Japanese\)](#)
日本図書館協会で作成した図書館のリンク集。OPACとホームページにアクセスできます。
現在の所、対象は公共図書館のみ。
- [世界の図書館\(Japanese/English\)](#)
筑波大の図書館で作成したリスト。国別に世界の図書館にアクセスできます。
- [世界の図書館\(English\)](#)
アメリカのBerkeley大学で作成した世界中の図書館のリストです。
- [国立国会図書館\(Japanese/English\)](#)
国立国会図書館の案内のほかに、最近1年に整理された和図書の検索ができます。
- [米国議会図書館\(English\)](#)
世界最大の国立図書館です。電子図書館も見られます。

<新刊図書情報など>

- [日本書籍出版協会<日本書籍総目録>](#)
- [図書館流通センター\(TRC\)\(Japanese/English\)](#)
- [丸善\(Japanese/English\)](#)
- [紀伊国屋\(Japanese/English\)](#)
- [新聞各社\(Japanese/English\)](#)

<オンライン情報検索>

- [PubMed\(English\)](#)
米国立医学図書館(National Library of Medicine)が作成する医学分野の雑誌文献データベース。
MEDLINEのWeb版。

<その他>

- [官公庁のリンク集](#)

図：リンク集の例として「学外サーバ」のページ

(館員・閲覧係 鈴木学)

宗教の時代から啓蒙の時代へ 『トレヴー・フランス語大辞典』1771年版によせて

森田伸子

フランスにおける国語辞典の歴史は、1635年、アカデミー・フランセーズの歴史とともに始まります。時の宰相リシュリューによって創立されたこの団体は、フランス絶対王政の要としてのフランス語の完成を主たる目的としており、フランス語辞典の編纂は当初からの一大課題でした。この事業は1694年に実を結び、以後今日まで改訂を繰り返しています（『アカデミー辞典』）。こうした国家公認の辞典に対して、それとほぼ併行して民間の一詩人が企てた辞典があります。詩人の名をとって『フルティエール辞典』と呼ばれ、アカデミーのものより数年早い1690年にオランダで出版されました。フランス語辞典に関する自らの特権的独占的地位を守ろうとするアカデミーの強力な妨害の中で失意のうちに亡くなった詩人の死後、外国でやっと出版されることができたのです。そして1704年、このフルティエールの辞典を今度はイエズス会士が改編を加えて新たに出版します。この辞典は、それが印刷された町の名前をとって、「トレヴー辞典」と呼ばれました。初版以来、1771年まで何度か版を重ね、そのたびに改訂を加えられました。今回紹介するのは、この最後の1771年版のものです。

アカデミーとフルティエールの対立点は、宗教的イデオロギー上のものというよりも、一方で、純粋で完全なフランス語の使用例を提示することによって国語の規範を創造しようとする立場と、他方で新語や様々な専門用語、さらにはあらゆる領域の事実の説明を含んだ百科辞典としてのフランス語辞典を目指す立場との対立でした。トレヴーの辞典がフルティエールのこうした百科辞典への夢を継承し、さらに一層充実、発展させようとしたものであることは、1771年版の序文にもはっきりと述べられています。この百科辞典への夢は後に、啓蒙思想家であるディドロやダランベール



らの手で、図版も含む膨大な『百科全書』として実現されます。18世紀フランスを代表するものとしてはこちらの方が後生に広く知られ圧倒的な影響を残すこととなりました。トレヴーの辞典の方が一部の研究者たちを除いてほとんど読む人もなく忘れ去られた感があるのは、これがイエズス会の手になるものだったという所に主たる原因がありそうです。カトリックの対抗宗教改革から生まれた教団の一つであるイエズス会は、

一方で様々な異端からカトリックの正統派の教えを守り、他方でますます世俗化しつつある社会の新しい要求に応える、という二重の要請のバランスを取ることによってフランスでの大きな勢力を獲得していました。1704年にこの辞典の初版が出た頃の彼らの主な敵は、ジャンセニストと呼ばれる一群の改革派カトリックの人々で、ここでは教義をめぐる神学論争が激しく闘わされました。そして1771年、最後の版が出た頃は、神学論争はすでに色あせたものとなり、「百科全書」を中心に結集した啓蒙思想家達が彼らの闘いの相手でした。この闘いは啓蒙の側の勝利に終わり、フランスは世俗性と合理性を旗印に近代的国民国家への道を歩みます。イエズス会はしばしば圧政、迷信、反動のシンボルとして断罪されました。歴史を闇と光との闘いのうちに見るこうした啓蒙の進歩史観から人々が否応なしに解放された時、トレヴーの辞典はアンシャン・レژیーム期のもう一つの世界像を語るもう一つの百科全書として歴史家達の関心をひくようになりました。そこには別の角度から光を当てられた啓蒙の時代の、より複雑で陰影ある像が浮かんでくるのが見られます。

* 西生田図書館所蔵：貴重書扱い

(教育学科教授)

本に学んだ4年間

小野越子

大学の図書館は高校までの図書館と違い、専門書が多いということがあげられる。それは単に、「読書」のみの目的だけではなく「調べる」という目的が追加される。つまり、大学とは研究の場であるということなのだ。

今はインターネットが流行しており、ペーパーレスの時代に移行している。手軽に情報を取り出しやすく、検索も容易であるという利点がある反面、キーワードを知らないと情報が手に入らないという点がある。しかしその一方で図書館では、たとえ自分が情報を知らなくともたどりつけることができるのだ。情報化が進んだこの時代だからこそ、本から得ることがたくさんあるに違いない。現に私はこの4年間で、図書館を利用し、たくさんのことを吸収できた。この空間で学んだ多くのことをこれからの糧にしていきたい。

(家政経済学科4年次学生)

図書館を利用するにあたって

神谷直子

初めて目白キャンパスの図書館に足を踏み入れた時、高校の図書館や地元の図書館とは全く違う専門的な雰囲気によって圧倒されてしまいました。何しろ1階から4階まで難しそうな本がひしめき合っているのです。右往左往してしまったのを覚えています。経験から言って、図書館をうまく利用するには、何よりも図書館に頻繁に足を運んで文献の検索の方法に慣れることが必要だと思います。

自分の手に入れたい本はOPACという機械で検索することができます。さらに現在はコンピューターも設置されているのでますます便利になりました。検索してみて、もし日本女子大学で所蔵していないということが分かって、諦めずに参考係の方に相談してみてください。良いアドバイスをいただきたいと思います。

レポート作成に、試験対策に、そして自分の専門の研究を深めるために図書館は欠かせない存在です。図書館を味方につけるかつかないかで学生生活は確実に変わってくるものと思います。早いうちから慣れ親しんでおかれることをおすすめします。

(日本文学科3年次学生)

私の好きなイス

汐見陽子

3年生の時から図書館でアルバイトをさせていただいており、図書館に通った回数は人より多いと思うのですが、利用者としては学問に不熱心な最近の学生らしく、レポートの〆切直前にかけ込みコピーを取ったり、数冊まとめて借りるという利用法がほとんどでありました。しかし、そんな私にも図書館の中で2ヵ所気に入っている場所があるのです。ひとつは1階の雑誌の閲覧用の机。ここは人の出入りが多くコピー機もあり、図書館の中では音や動きのある場所です。私はこの場所にいるとなぜか安心して何時間も調べものができました。もうひとつは4階の手前から3つ目ぐらいの書架の奥の窓辺に置いてあるイス。人の来ることの少ない4階の奥では小説や専門書を集中して読むことができました。私にこのような2つの好む場所があることは、ひとりっ子である私の異なる2つの性格、つまり、前者は寂しがりであること、後者は一人の世界に閉じ込められたがることを表しているのかもしれませんが。

皆さんは、図書館の中で好きな場所はどこですか。

(社会福祉学科4年次学生)

図書館（目白）からのお知らせ

雑誌記事索引の検索方法がかわります

雑誌記事索引（国立国会図書館編）の最近のものは、平成11年3月までCD-ROM版で検索できましたが、4月よりインターネットのNICHIDAI/WEBサービス[雑誌記事索引ファイル]での検索方法にかわります。利用方法については、館員までお尋ねください。プリントアウトも従来どおりできます。

ケミカルアブストラクトはCD-ROM版になります

洋雑誌「Chemical abstracts〔P540.5-C〕は、平成10年12月刊行まで冊子体で購入していましたが、平成11年1月刊行よりCD-ROM版を購入します。「CA on CD〔CR P540.5-C〕の利用の申込みは、1階カウンター（雑誌フロアー）で受け付けます。利用受け付け時間は、月～金曜日9:10-17:00、土曜日9:10-12:00で、1階フロアーのパソコンでご利用になります。プリントアウトの料金は、他のCD-ROMと同様に1枚10円です。

参考図書コーナーの資料の配置を変更しました

2階参考図書コーナーの資料の配置を変更しました。今まで利用していた参考図書が見当たらない場合は、参考係にお尋ねください。

2階新刊雑誌展示棚の資料を移動しました

2階新刊雑誌展示棚について、10台中2台（OPACコーナー側）を撤去し、展示雑誌などの資料は、残り8台の棚につめて展示しました。4月末頃に、OPAC用のパソコンの増設を計画しているためです。

図書館（西生田）からのお知らせ

OPACネットワークプリンターの運用開始

平成10年9月より、OPACネットワークプリンターの運用を開始しています。パソコンの検索画面のプリントアウトをした場合は、参考デスクに申し出てください。プリンターの利用規則は次のとおりです。

利用時間 月～水、金 9:30-18:30
木 9:30-17:00
土 9:30-14:30

料 金 1枚 10円

*画面コピーではなく、検索結果すべてがプリントアウトされますので、データによっては多量になる場合があります。注意してください。

利用範囲 資料検索データ（学外サーバーを含む）

編集後記 図書館長西村圭子先生には、第93号（1995年6月発行）の巻頭言「図書館との出会い」から4年間11号に渡り、巻頭言を毎回執筆していただきました。毎号丁寧に推敲された原稿を拝受しました。西村館長は、この3月御定年で退任されますが、どうぞ今後ともご指導をお願いします。川の流れるように、図書館の過去・現在・未来の歴史も続いてゆくのでしょうか。8名の先生方より「今、学生にすすめる本」の紹介をしていただきました。あなたどれか読んでみてくださいね。理学部長国府田先生作の巻頭・巻末のカットは、3号連続登場です。お礼申し上げます。（田口）

